

新発田藩京都留守居寺田家と旧蔵文書

青山忠正
浅井良亮

〔抄録〕

寺田家は、十八世紀において京都の呉服商であったが、十九世紀初めに、越後国新発田しんぱたの大名・溝口家の用聞ようきき、ついで京都留守居を務めるようになって士分に取り立てられ、やがて明治四年の廃藩置県を迎える。その間、六十年以上にわたる関係史料は、約三千点にのぼる。なかでも、二十六冊に及ぶ御用留は、京都留

守居の活動状況を知る上で興味深い。本稿は、この寺田家文書の概要を紹介するとともに、御用留の一端を提示して、その史料価値などについて考察する。

キーワード 京都留守居、寺田家、新発田藩、溝口家

はじめに

現在、佛敎大学図書館には、『新発田藩 京都留守居役 寺田家文書』と銘打たれた、約三千点に及ぶ史料が所蔵されている。「新発田藩」は、すなわち、越後国新発田に本拠を持つ大名・溝口家の意味である。寺田家は、文化一〇年（一八一三）以来、溝口家の京都用聞を、ついで文久三年（一八六三）からは、京都留守居を務めた京都在住の家来であった。

寺田家文書は、この京都用聞から留守居時代にあたる、喜右衛門政求、喜三郎政忠、喜三郎政得の寺田家三代を中心にした史料群である。なかでも、いわゆる御用留二十六冊の記事は、文化一〇年から明治十二年（一八七九）に及び、十九世紀という変動期京都の政治社会を通観する内容を持つ。いっぽう、大名家の京都留守居という役職については、これまで全くと言ってよいほど、実証的な研究が行われず、その具体的な活動状況や、政治上上で担った役割などについては、ほとんど何も知られていなかった。それは、ひとつには近世の京都で公家

側との折衝などを担当する京都留守居が、研究史上、重要視されなかったことの表れでもあらうが、さらには、京都留守居のまとまった史料が発見されなかったためでもある。

これらの点を踏まえ、筆者（青山忠正）は、「京都留守居を通した公武関係史の研究」というテーマで日本学術振興会から科学研究費の交付を受け（平成二五～二七年度）、寺田家文書を対象とした調査・研究を進めている。本稿は、その経過報告の意味を含め、近世末～近代初期の寺田家と、その旧蔵文書の概要を紹介するとともに、御用留のなかから内容の一端を提示し、その史料的な価値について考えてみることにしたい。なお、共著としての執筆分担は、「はじめに」・第二章・「おわりに」は青山忠正が、第一章は浅井良亮が担当した。

第一章 寺田家と旧蔵文書

一・寺田家文書の概要

『新発田藩 京都留守居役 寺田家文書』は、総点数二八八九点の文書群である。この文書群は、京都市中に居住した寺田家に伝えられたもので、その後、佛敎大学名誉敎授・高橋貞一氏（故人）を介して、佛敎大学図書館に所蔵されるようになった。その存在は、高橋氏によって一部が翻刻・紹介されているものの^①、殆ど知られてはいない。近年、図書館による整理・目録化の作業が行われ、現在は公開に向けた準備が進められている。

文書群の構成は、年代別にみると、主として十九世紀、特に文化年

間から明治初年にかけて作成された文書が中心となっている^②。この時期は、後述するように、寺田家が越後国新発田の大名・溝口家の京都留守居役などを務めた時期に相当する。したがって、溝口家の「京都御用」に関わる文書を膨大に含むのが、本文書群の特色である。

内容の類別を試みると、収録されている文書は概ね三つに分類することができる。

第一に、呉服御用関係の文書である。もともと寺田家は、「桔梗屋」の屋号で呉服商を営む町人であった。宝暦年間頃から溝口家の「呉服其外京地御用向」を^③務め、呉服などの調達を担った。本文書群中には、溝口家からの注文書、通帳、送金に関わる書類などを多数確認することができる。

なかでも注目されるのは、新発田表に送られた、「色見本」である^④。呉服生地を小さく裁断して包紙に添付し、書翰同様の体裁とされた「色見本」からは、当時の呉服注文の仕法が窺える。また、生地そのものを分析すれば、溝口家がどのような生地や色彩を好んで買い求めたかを明らかにすることができよう。服飾史の観点からも、興味深い資料である。

第二に、京都御用関係の文書である。寺田家は、文化一〇年（一八一三）に京都御用を拝命して以来、明治四年（一八七一）の廃藩置県に至るまで、溝口家の京都御用を務めた。この間、寺田家は三代にわたって膨大な記録を作成・保存しており、これらが本文書群の中核を成している。

なかでも特筆すべきは、『諸事御用留并日並』などと題された、御

用留の存在である。この二十六冊に及ぶ一連の留帳は、喜右衛門政求が京都用留を拝命した時点から作成され始め、喜三郎政得が非役となるまで作成され続けた。凡そ六十年間、近世から近代への過渡期に相当する京都留守居役の記録が、ほぼ間断なく現存しており、極めて史料価値が高いと言える。^⑤

第三に、川口忠兵衛家の文書である。「升屋」の屋号を持つ川口家は、京都「大宮通五辻上ル町」に所在し、丹後国田辺の大名・牧野家の用達商人であった。^⑥

川口家の文書が寺田家に伝わった経緯は定かでない。寺田家と川口家は、喜兵衛相統の際に「母代親類」として川口忠兵衛が連署していることから、^⑦喜右衛門の妻・つよを通じた血縁があったとみられる。史料の状況から、明治期に何かしらの由縁があつて寺田家に渡り、寺田家文書の一部として伝存したものとみられる。

川口家関係の文書では、富士谷家の借財整理に関するものが注目に値する。富士谷家は、筑後国柳川の大名・立花家の京都留守居役を務めた家であるが、国学者の家柄としても知られ、なかでも成章・御杖・元広などは高名である。富士谷家は御杖の隠居前後に膨大な借財を抱えていたようで、その整理に川口忠兵衛が関与している。一連の文書からは、困窮した富士谷家の経済状況が明らかにになると共に、川口家による借財整理の様相が明らかになるう。

二・寺田家の人物

寺田家の人物として、名前が確認できる最も古い人物は、与右衛門

(生没年不明)である。宝永七年(一七一〇)年の借銀証文に「桔梗屋与右衛門」の宛て名があることから、^⑧遅くとも十八世紀初頭には「桔梗屋」の屋号を名乗り、呉服商を営んでいたと考えられる。

与右衛門の後を継いだ喜右衛門(生没年不明)の代には、家業が繁盛したようである。寛延・安永年間(十八世紀後半)には「江戸店」の存在を確認することができ、^⑨また宝暦年間(一七五〇年代)には溝口家への「御出入」が始まっている(以下、三三頁の系図を参照)。^⑩

喜右衛門は、寛政五年(一七九三)に隠居し、家督を息子の喜八郎(生没年不明)に譲った。^⑪ところが、相統直後に喜八郎が急逝したため、喜八郎実弟の喜兵衛が急遽家督を継ぐことになった。^⑫この際、相統に伴う混乱から家業不振に陥った寺田家を支えたのが、喜右衛門の妻・つよ(生年不明・文政二年没)である。つよは、家政を仕切り、さらに川口家の協力を得て家業の維持に尽力した。^⑬

喜兵衛(明和八年・文政七年)は、家督相統後、喜右衛門の名を襲名した。文化一〇年、喜右衛門は溝口家の「京都御用聞」として「被召抱」ることになった。^⑭これを境に、喜右衛門は寺田姓を名乗り、諱を政求とした。また、非常帯刀も許され、寺田家は次第に武士的身分へと変貌していくことになる。

文政七年(一八二四)、政求は大徳寺役人・笠原元達に嫁いだ妹の次男・喜三郎(文化元年・安政三年)を養子に迎え、家督を譲った。政求には虎次郎(文政三年・天保十二年)という実子がいたが、虎次郎はこの時五歳の幼年であり、加えて「出生之砌も虚弱」であったとい^⑮、事実、二十三歳で若死にしている。甥の喜三郎に家督を譲った

のは、相続直後に政求が死去していることから、現実的に家政と家業を担い得る人物に相続させる必要があったためであろう。¹⁶ 家督を継いだ喜三郎政忠は、溝口家より「京都御用聞」ならびに「御服御用之儀」は「是迄通可相心得」と命じられ、呉服御用・京都御用の職務をも継ぐこととなった。

安政三年（一八五六）、政忠が急死し、実子である弘吉郎（天保七年生・没年不明）が家督を相続した。弘吉郎は、喜三郎と改称し、諱を政得としたうえ、家督相続と共に、溝口家の「京都御用聞」の職務を継承した。¹⁸ 折しも、政局に於ける天皇・朝廷の政治性が拡大し、諸大名による「京都手入」が活発化し始めた。溝口家も、京都御用の重要性を次第に強め、政得への御用依頼を急増させていくことになる。そして、文久三年（一八六三）、政得は「京都留守居役」を拝命し、¹⁹ 溝口家の「家来」として京都周旋の担い手となった。²⁰ また、拝命に伴って「御中小姓」に取り立てられ、寺田家は名実共に士分へと編入されることになる。²²

三・扶持米取

既に述べたように、寺田家は宝暦年間頃から、溝口家の呉服御用を務めた。一方で、早くも明和年間（一七六〇年代後半）には溝口家の代金支払が滞りがちになり、安永五年（一七七六）には滞納金が三百両を超えるほどまでに膨らんでいる。²³ 溝口家は滞納金を「年賦二而相渡」すことを約定したが、²⁴ 返済はすぐに滞り、喜右衛門はたびたび歎願の形で支払を求めた。²⁵

この状況を打開するため、溝口家は喜右衛門に扶持米を支給することとした。

覚

一、桔梗屋喜右衛門方と相調候呉服物代残金可指遣処、去卯之年在所過分承候様二付、当分難遣候、追而金子相渡候迄、為続毎月七人扶持宛相送可申候、尤金子段々相渡候ハ、扶持方之儀者相止可申候、此段家老共申候²⁶

右の覚書によると、呉服代残金を当分支払い難いため、毎月七人扶持を支給することが約束されている。ただし、追々支払が再開すれば、支給を停止することが付言されている。つまり、この扶持米は、支払滞納への迷惑料のような性格のものであった。時期的には、右の文中「去卯之年」が天明三年（一七八三）と見られるので、その翌年からであろう。

ところが、寛政五年（一七九三）、喜右衛門から喜八郎への相続にあたり、この扶持米の在り方に変化が生じている。

桔梗屋 喜右衛門

代 半兵衛 江

其方儀、年来之上病身二罷成候二付、致隠居、忝喜八郎江家名相続為致、御扶持方差上度段、願之通被仰付候、是迄其方江被下置候御扶持方、無相違喜八郎江被下置候間、呉服御用等致出精相動候様可申含候²⁷

桔梗屋の家督相続に際し、喜八郎へ「御扶持方差上度」旨が喜右衛門から願い出された。これに対し、溝口家は「御扶持方、無相違喜八

郎江被下置候」と返答している。つまり、本来迷惑料であった扶持米が、ここでは相続の対象として捉えられているのである。以後、扶持米は代々相続されることになり、寺田家は扶持米取となった。

扶持米取に関する文書としては、その契機となった滞納金「古御掛金」一件の書翰に加え、寛政二年（一七九〇）に「式人借上」を申渡された文書などがある。²⁸ また、扶持方の扣帳が数点残されており、扶持米の支給実態を把握することができる。²⁹

四・京都用聞拝命

もともと、溝口家の京都留守居は、深尾家が務めていた。京都地誌の類では、天明年間（一七八〇年代）頃から、その名を確認することができる。³⁰

ところが、天明二年（一七八二）、深尾家が突如として音信不通となる事態が生じた。新発田表から寄せられた書翰によると、「其地深尾右源太方江当三月已来度々用状指登候所、一向右返事無之」という状況が続いており、溝口家の困惑する様子が窺える。³¹ その後、深尾家からの連絡は「一向無之」という状況が続いた。³²

こうした中、文化年間には「深尾貞次郎殿、段々不埒之筋合有之」という問題も起こった。³³ これを機に、溝口家は深尾家の用聞罷免を決定し、京都御用の新たな担い手として、桔梗屋に白羽の矢を立てた。そして、文化一〇年六月十九日、喜右衛門政政は京都用聞に任じられた。

桔梗屋喜右衛門

其方儀、京都御用聞江召抱、御扶持方は迄之通七人扶持内式人扶持御借上、御配当金六両被下置、三日御礼小役人格席二被成下、懸隔候勤方之儀二付、御用向可入念候、尤御服用御用之儀茂是迄之通可相勤候

但江戸御用人支配³⁴

京都用聞は「江戸御用人」すなわち江戸留守居役支配とされ、格式は「小役人格」と位置付けられた。また、従来の扶持米に加え、「御配当金六両」が支給されることとなった。

京都御用は、拜命時に交わされた二十三箇条の起請文によると、概ね三つの職掌が期待された。それは、①京都町奉行・朝廷方への使者勤、②上方情報の収集、③上京者の世話、である。

このうち、特に注目されるのは、使者勤を通じて朝廷・公家方との交際である。朝廷に対しては、仁孝天皇や孝明天皇の即位時に、政求や政忠が溝口家の使者を勤めており、その一件帳が数点残されている。³⁶ また、溝口家の縁家である久世家とは、宗徳院（久世通根娘・溝口直侯継室）法要などを通じて親密な交際が始まり、³⁷ 明治初年頃まで交流が続けられている。

五・京都留守居役拝命

文久二年（一八六二）一〇月、將軍徳川家茂は「来二月御上洛」に關し、「国許より上京之義ハ、勝手次第可被致旨」を諸大名に伝達した。³⁸ 参府中の溝口直溥は翌春の上京を決意し、京都では政得を中心に上洛準備が進められることになった。当時、溝口家は京都屋敷を構え

ていなかっただため、政得は直溥らが滞在する「御旅館」の手配などに奔走した。⁽⁴⁰⁾直溥は翌年二月二十七日に入京し、三月四日に離京した。⁽⁴¹⁾

文久三年三月三日、政得は京都留守居役を拝命した。

寺田喜三郎

其方儀、出精相勤、其上御高直後品々御遣立も有之、此度

御上京ニ付、御用向取扱被仰付候処、心配行届候ニ付、格別之詔

を以御中小姓江御取立被仰付、御配当金式両増高七両被成下、京

都留守居役被仰付、重き御用向ニ付、万端入念可相勤候

但御役料金年々三両宛被下置、是迄御借之式人扶持御戻被成下⁽⁴²⁾

京都留守居役の拝命に伴い、政得は「御中小姓」に取り立てられた。

また、扶持米・配当金の支給に加え、「役料金年々三両」が支給されることとなった。

政得の京都留守居役任命は、上洛準備への褒賞の意味もあるが、現実には溝口家による京都窓口の整備という意味合いが大きい。その最たる例が、京都屋敷の設置である。同年八月、政得は京都町奉行に対し、「溝口主膳正様、当地二屋鋪無御座、差支之儀も御座候」ため、「東堀川一条上ル町」に所持している「居宅」を「此後主膳正江差出、同人屋敷ニ仕度」旨を願ひ出ている。⁽⁴³⁾

また、この頃から諸大名家の京都留守居役との交流が始まっており、彼らからの書翰や廻達文書が多く確認できる。⁽⁴⁴⁾周旋方として上洛してきた京都留守居役の多くは、中下級の士分層であった。政得が「御中小姓」に取り立てられたことで、彼らと同格になり、留守居交際の一員として受け入れられたのであろう。特に、加賀前田家を中心とする

北陸諸大名とは、次第に「北陸道筋拾壹軒」などと称された留守居組合を形成しており、慶応年間から明治初年にかけて、活発な交流を窺うことができる。

六・役儀御免

明治維新を迎え、寺田家を取り巻く政治的環境は劇的に変化することとなる。

慶応四年（一八六八）八月二十日、行政官は「公用人ヲ相設、従前留守居役之職務ヲ掌リ居候様可致旨」を布告した。⁽⁴⁵⁾これを受け、同年十二月二十五日、溝口家は政得を「公用人助役」に任じた。⁽⁴⁷⁾なお、公用人助役任命に伴って、政得に「新知八拾石」が下された。

さらに、明治二年（一八六九）六月の版籍奉還直後、太政官は「諸藩公用人、自今京都ニ差置ニ不及候事」を通達した。⁽⁴⁸⁾東京遷都以来、京都に残留していた留守官を引揚げさせることに連動した措置であり、以後、京都に公用人を配置しないことが原則とされた。ただし、この通達では「但、御用有之候節相弁へ候者差置、兼而其姓名可届置事」との但書が付されたため、溝口家は「御役名之儀不都合ニも可有之ニ付、公用方之唱見合」こと、つまり、「公用方」の役職名は用いないが、類似の職務を担う者の設置を検討し、その結果として、政得への京都御用委任は継続することとした。

明治三年（一八七〇）には、新発田藩の職制改革が本格化し、同年九月二十五日、「公用人廃止、大属称呼被仰出候事」が新発田表より通知された。⁽⁵⁰⁾

明治四年七月の廃藩置県によって、新発田藩は消滅し、のちに新潟県となった。同年十二月二十一日、政得は「役儀御免」とされ、さらに「西京邸取払」が通達された⁽⁹⁾。寺田家が担ってきた京都御用は、ここに終焉を迎えた。

京都用聞拜命以来、三代にわたって作成され続けた寺田家の記録類は急速に数を減らし、明治以後の事蹟を追うことは難しい。「非役」以後にも細々と続けられた御用留の記載は、明治十二年（一八七九）末の京都府郡村掛による出頭通知を以て、筆が擱かれている⁽¹⁰⁾。

第二章 京都留守居としての寺田喜三郎政得

一・禁門の変の情報とその後の政治情勢

文久三年（一八六三）三月、京都留守居に任命され、同時に七人扶持・配当金七両の士分に取りたてられた寺田喜三郎政得は、一年と四か月後の元治元年七月、禁門の変に遭遇することになった。御用留第23冊『元治元年甲子歳 三月七日改 慶応元年 御用状留記 七月改 新発田留守居方』（調査番号215）には、次のような記事が見える。急を知らせる七月二十日付け書簡の写しであるが、宛先は、江戸邸の「城使」である。

態々以急使申上候、扨十九日曉頃、存外之騒々敷相成候模様、兵部殿より承候分、致注進候

一、十七日、宮摂家堂上方不残為御評議惣参内有之、翌十八日曉御退出之由、御役方ハ四ツ時分御退出、不穩趣承居候所、存外之次

第相成申候、右ハ長印打払御内意御治定之由之處、勘者有之候哉ニも相見へ、御達し無之内、十八日申之下刻、長より書付差出し、尤御所幕府江右之文言、松平肥後守先達而中より九門内ニ罷在候処、加誅伐度趣ニ付、洛外へ退散いたし候様相願度、自然御取計ニも不相成候義ニ候ハハ奉恐入候得共、御ひさ元を奉騒候旨、書取を以差出し候、十九日曉寅之刻より長人数繰出し、卯之上刻、合戦相始り申候、右ハ薩土会細其外、諸侯居合人数繰出し、所々ニて合戦有之、双方手負深手即死多分有之、長死人首老人も無之、何れカ持行候由、最初ハ尤鉄砲之由

一、鷹司殿へ長人逃入候所、会彦よりボンベン打かけ、焼失、夫より市中大火

一、九条殿同様、是ハ半焼、其後烏丸通中立売下ル醍醐殿へ長十四、五人逃入候所、細よりボンベン打かけ、焼失、夫より市中大火、醍醐殿向ひ勸修寺殿、此方へ、長之執奏家ニ付、長多分逃入候趣、是又ボンベン打懸、焼失、長家老福原越後、深手之由、倅即死之由、倅義ハ駈と不相分候得共、多分倅之由ニ御座候、市中逃入候長并亡命之党、三百人ニハ不足之由

一、上ハ中立売室町より始り、夫より境町丸太町、夫より八方へ広り、尤飛火も多分有之、北風強火勢甚敷、町家不残退散故、自然ト大火ニ相成、実ニ恐敷、目も不当、歎息罷在候仲ニも砲発有之、如何可相成哉、市中丸焼ニも可相成哉ニも被存候

一、十九日曉、天龍寺へ薩州其外
一、山崎 土州、藤堂、会津、彦根

一、伏見

右之通、追手被差向候御達し有之、いづれも勇々敷由

一、十八日昼四ツ時分、長屋敷、伏見同斷、焼払候

一、御所鴨下上へ立退、御手配之所、御築地内格別之事無之ニ付、

御見合ニ相成候得共、同所へ広り候ハ、御立退之趣ニ御座候

一、一頃ハ屋敷間近ク風並不宜、誠心痛罷在候、先只今之所ニ而ハ

先別条無之相見候へ共、何分火勢強変火故、実心配罷在候、人数

も無之、御察可被下候

一、上ハ中立売室町始り、飛火、新町中立売まわりへ広まり、上東

にて寺町竹屋町辺中程より川東へ拔、粟田境内迄、下は四条高瀬

辺中程より南松倉^{マヤ}辺より追々下り、西ハ小川下立売辺より追々火

勢強、今ニ鎮火不申次第火勢甚敷、其外不穩ニ付、如何可相成哉、

難計、市中不殘何れか参り、居り不申、尤諸商売人ハ無之、猶

追々可申上候得共、先不取敢、不一方故、荒増得貴意候

一、不穩ニ付、天奏御月番迄、御伺罷出置候、併人数も無之故、直

ニ引取申し候、乍序申上候、右之段得貴意度、如斯ニ御座候、恐

惶謹言

七月二十日

寺田——

寺田救右衛門^{マヤ}殿

鈴木弥五大夫殿

尚々御用部屋へも可差出之所、混雜罷在、一紙ニ而申上候、宜御

取成置可被下候、已上

右のように、まだ前日の戦いで発生した火災が収まらない状況の下

で、長州兵と薩摩・会津兵との戦いや火災の模様などが報ぜられている。当然とはいえ、このような京都の状況を、江戸邸や国元へ報知することが、京都留守居として、大事な職掌の一つであった。

この書簡に続いて、戦いの経過などを記した別紙が付されているが、ここでの掲載は省略する。さらに、朝廷内の人事異動の状況が、次のように記される。

一、七月二十六日、坊城大納言殿、仍御所旁、伝奏御役、願之通、

御免被仰出候事

右之由、兵部殿より申来ル

一、鷹司前大納言殿

一、有栖川中務卿宮

々 大納言殿

々 帥宮

一、大炊御門大納言殿

一、中山前大納言殿

一、正親町大納言殿

一、橋本中納言殿

一、石山少将殿

一、五辻大夫殿

々 右兵衛権佐殿

一、平松甲斐権介殿

一、勧修寺弁殿

一、日野大納言殿

十二軒

右以 勅使、御不審之儀、有之候ニ付、参内被止并他出人面会

被止候旨、被仰出候事

八月四日、被仰出候事

一、議奏阿野宰相殿、依御所旁、御願之通、御役御免

右同日

一、日野殿

右議奏加勢、退役被仰付候事

このメンバーは、おむね長州系とみなされる宮および公卿であり、彼らが事実上の処分を受けているのである。その事実は、前年の八月十八日政変から、この禁門の変にかけて、政局の焦点が、長州や薩摩・会津など武家側の勢力変動だけでなく、朝廷内部のそれにも関わっていたことをうかがわせる。こうした情報を、喜三郎は、いち早く入手し、御用留に記載していた。なお、直接の記事が見当たらないが、当然ながら、国元にも直ちに通報されたことであろう。

このあと、御用留の政治向きに関する記事は、元治元年中は、あまり精密ではなくなり、翌慶応元年（一八六五、四月七日改元）に入つて、閏五月の將軍家茂の上洛、下坂に関する記事以降は、長州再征に関するケースが多くなる。

次の冊である御用留第24冊『慶応二寅歳 御用状留記 從正月 新発田留守居方』（調査番号216）は、慶応二年（一八六六）正月から同四年（九月八日、明治改元）正月までの記事を含むが、慶応三年（一八六七）十月以降の政治的な激動の時期になつても、政局動向を直接にうかがえる記事は、ほとんど見当たらない。それは、この時期の政局を主導した薩摩島津家や土佐山内家と、新発田の溝口家が疎遠で、情報を入手できなかつたか、あるいは逆に言えば、薩摩・土佐側が情報を厳重に秘匿していた可能性が考えられる。

また、この冊に続く第25冊『明治二巳年 御用留記 公用方役所』

（調査番号217）は、明治二年四月二十四日から明治四年十二月二十五日までの記事なので、慶応三年末頃から明治二年四月二十三日までの間は、御用留としては空白期間になる。この時期の大半は、いわゆる戊辰北越戦争で新発田藩は政府軍と敵対する状況になるので、政府からの公式的な連絡は、途絶えた状態になつたのであろう。

しかし、この期間でも、喜三郎は私的な日記を残していた。その日記は、『寺田家文書』中には含まれず、維新史料編纂会が作成した写本『新発田藩士 寺田政得日記 自慶応三年十一月十日 至明治元年閏四月十五日 全』（維新史料引継本―II 545、昭和三年四月七日校正終了、台本出所は伯爵溝口直亮所蔵原本）として、現在は東京大学史料編纂所に所蔵されている。この日記は、写本の内扉（喜三郎自身が記した表紙）に、「丁卯十一月ヨリ戊辰閏四月迄 私日記 寺田政得」と見えるように、個人的な備忘録であるが、それだけに日常的な活動の様子が具体的にうかがえる内容である。ちなみに、慶応三年十二月八日条の記事を紹介しておけば、次のとおりである。

一、八日、廻状到来候付、御仮建所へ重臣、留守居之内、被差出候
二付、喜三郎、八ツ時頃より罷出候事

呼び出し通知に依じて、喜三郎自身が御所の仮建に出頭したことが分かるが、そこでどのようなことが行なわれたのかは記載がない。また、翌日の、いわゆる王政復古政変についても、「九ツ時頃より市中騒々敷相成候事」としか記されていない。総じて政治情勢について、自身の感想などは見当たらず、淡々とした記載である。それでも慶応四年四月中までは、政府から指令などの公式伝達が、溝口家に対して

あったことが、この日記から分かる。それを過ぎ、北越での戦いが本格化する閏四月半ば以降については記載がない。したがって、翌二年四月まで、ちょうど一年間は、完全な空白期間である。

二・ 版籍奉還と新発田藩

溝口家は、もともと領知高五万石の外様大名（柳間詰）であつたが、万延元年（一八六〇）に加増され、十万石（大広間席）に昇格して^③いた。徳川將軍家との関係は良好だったのである。この時期の当主は溝口直溥（家督は天保九年八月五日、慶応三年八月二十八日）で、天保四年（一八三三）以来、従五位下主膳正に叙任されていたが、加増の翌年、文久元年（一八六一）に従四位下に昇叙された。そのような背景もあつてか、奥羽列藩同盟が成立したあと、新発田藩は長岡藩（牧野家）以下、北越六藩とともに、同盟側について政府軍と敵対した。しかし、降伏後に厳しい処分を受けることはなく、領知高も十万石を保持している。なお、家督は慶応三年八月に直正に継承されていたが、直正が従五位下伯耆守に叙任されるのは、明治元年十二月三日である。^④明治二年六月には、溝口直正は、ほかの大名と変わることなく、旧領分を管轄地とする地方行政制度「新発田藩」の知藩事に任ぜられた。この点について、第25冊『明治二巳年 御用留記 公用方役所』（調査番号217）には、「七月三日登御用状ニ申来ル」として、次の記事がある。

新発田藩知事被
仰付候事

明治二年己巳六月

於東京御達書

御名

今般版籍奉還之儀ニ付、深ク時勢ヲ被為察、広ク公議ヲ被為採、政令帰一之思召ヲ以、言上之通、被聞食候事

六月

行政官

知藩事任命の辞令であり、その文言は、他藩の場合とまったく同文であるが、当然とはいえず、「新発田藩知事」に対するそれは、他藩の史料では見られないものである。

ちなみに、同時に発せられた「諸務変革」指令に基づき、各藩から従来支配地の総生産高、年貢収納高などが十月までに報告されるが、その報告を太政官修史局がまとめた「藩制一覧表 第七」によれば、新発田藩の場合、その数値は次のようである。^⑤

○新発田藩 越後蒲原郡、岩代信夫郡之内

高 拾三萬九千百貳石壺斗八升七合三勺五才 越後国蒲原郡ノ内

正租 米六万四千百七十石五升六合三勺

雑税 米五千三十五石四斗一升七合六勺

金二十六兩一分

永三百八貫六百七十七文九分八厘五毛

銀七十五貫五百五十三匁六分四厘

於東京御達書

御名

錢五千百六貫六百十文

荳六斗九升四合 但、定納ニ付、代米不相渡

大豆三千七十三石二升五合八勺 但、代米渡正納之事

荳二百五十三石三斗四升六合二勺 右同断

稗百七十八石九升七合四勺 右同断

(岩代国信夫郡の内、中略)

士族戸数 八百七十軒

人員 四千七百八十三人 内 男二千三百三十六人 女二

千四百四十七人

卒戸数 千十七軒

人員 五千六百八十五人 内 男三千九十一人 女二千五

百九十四人

戸数 三万三千二百八十二軒

人員 十七万八千九百八十六人 内 男九万二千二百二人

女八万七千七百八十四人

(以下略)

右によれば、実際の生産高が十四万石に近く、収納年貢高も正租だけで約六万五千石あったことが分かり、さらに総戸数三万五千戸や総人口約二十万人など、地方行政の単位として、基礎的なデータを知ることができる。

また、「藩制一覽表 第九」収録の新発田藩職員表によれば、その顔ぶれ及び兵制は、次の通りである。

大参事 溝口伊織 窪田平兵衛

権大参事 溝口甚太郎 速水八彌 溝口半兵衛

少参事 宮北郷左衛門 梶弾右衛門 里村縫殿 三浦彦太夫

権少参事 佐藤八右衛門 久米三左衛門 七里作左衛門 寺田

惣次郎 山崎重三郎 寺田與一郎 相馬作左衛門

山田吉太郎 三宅助三郎 富樫萬吉 速水織衛 遠

藤勇二郎

これによって、新発田藩制期の主要職員の氏名を確認できるが、とくに筆頭大参事溝口伊織、次席大参事窪田平兵衛、権少参事寺田惣次郎らは、文久期以降の御用留に、たびたび登場する人名であり、明治二年以降も、藩政の中枢に携わっていたことが知れる。この職員氏名に続いて、兵制の書上げが、次のように記載される。

歩兵 三大隊 一小隊六十人 八小隊ヲ以、一大隊トス

砲兵 二百人

兵制は各藩によって差があるため、一概には言えないが、十万石規模の中藩(十万〜三十九万石)で歩兵千五百、砲兵二百は少ない数ではないと思う。なお、「藩制一覽表 第七」収録のデータでは、兵員数のあとに大砲二十四門、小銃二千挺と追記がある。

三・寺田政得の秩禄処分

喜三郎は、明治元年十二月二十五日を以って、溝口家の公用人助役に任ぜられ、新知八十石を宛がわれていた。この当時は、すでに最初の東京行幸が行なわれた直後で、東京が新たに首都となることが明らかに becoming したがつて、「公用人」といっても、実態は、

以前と同じ京都留守居と見てよいであろう。実際に、天皇睦仁（明治天皇）は、翌二年三月、東京再幸を実行し、再び京都に戻ることはなかった。版籍奉還が行なわれるのは、その六月であるから、喜三郎が知行取りの武士であった期間は、わずか半年だったことになる。

版籍奉還は、前節で見たように、旧大名が各藩知事に任せられる事態が、現象としてみれば中心に見えるが、彼らが家臣を抱えることは禁止されたから、旧家臣から見れば、形式上は召し放ちになったと同様である。実際に、各藩知事と旧家臣との主従関係は解消され、旧家臣は「士族」と呼ばれることになった。その士族に、知行や俸禄が支給されることはなくなったわけだが、そのかわりに、「家禄」という生活資源が現米で給付された。いまだ一般には理解が浸透していないようだが、この家禄は、それまでの知行や俸禄とは、はっきり質が異なるものである。

つまり、知行や俸禄は、主君から家臣に賜った「御恩」であり、これに応じて家臣は「奉公」に励まねばならない。その奉公の最高の形態は、主君の馬前で討ち死にすることである。これとは異なって、家禄は、藩から給付される生活資源であり、主君に対する奉公の義務は消滅している（藩職員に任用された者には官禄が、別途支給）。たとえば、給料に対する年金のようなものだが、その反面、やがては解消されることが前提となっていた。

御用留の最終冊にあたる第26冊『明治四未歲從正月 申七月改 至 明治□年十二月マテ 御用留 政得』（調査番号218）は、右のような経過に関わる内容を含むが、表題から見ても、もはや大名溝口家京都

留守居の御用留でないことはもとより、新発田藩公用人のそれでもなく、士族寺田政得の個人的な公式日記とでもいふべき性格の記録になつてゆく。

明治四年七月十四日、各藩知事はいつせいに免官され、新たに県令以下の県職員が任命されていた。いわゆる廃藩置県である。これにともなつて新発田藩は廃止され、旧藩領を含む領域には、やがて新潟県が設置された。寺田政得（明治五年正月、戸籍法施行に伴う戸籍名）は、明治三年九月二十五日、新発田藩から「大属」の役職に任ぜられていたが、明治四年十二月二十一日、廃藩置県にともなう措置として、すべての役儀を免ぜられた。この間の居住地は、依然として京都である。

こうして寺田政得は、新潟県貫属士族という立場で、家禄十一石（廃藩置県後、大蔵省が一括管理で藩から引き継ぐ）を受給しつつ、京都での生活を続けることになるのである。御用留第26冊には、明治四年十月九日、太政官から新潟県庁宛ての布告として、次の文書が記され、わずかに、御用留としての性格を漂わせている。

十月九日御布告

縣地一定之御規則、追而可被仰出候得共、元諸藩之分、士族卒禄制授産之方法並負債消却之目途等、各地方ニ於而從來之便宜ニ随ひ、兼而見込之次第も可有之候間、詳細取調、右方法書相添、大蔵省へ可伺出事

辛未十月

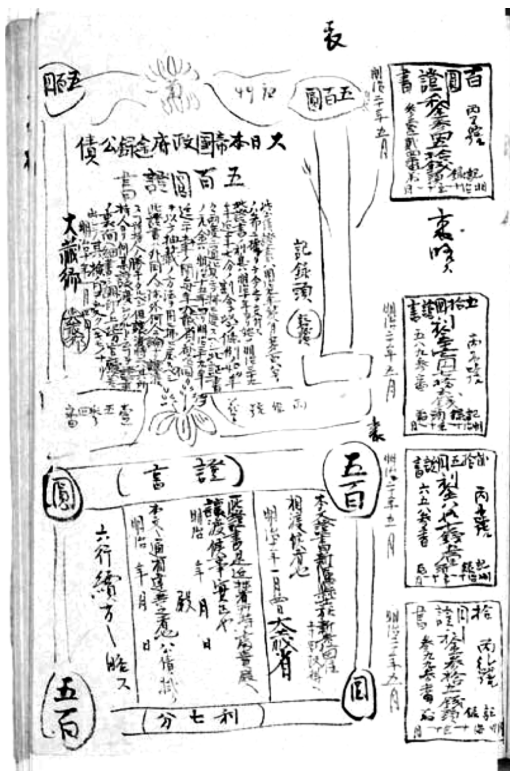
太政官

新潟県御庁

ナリテ、寺田政得の本籍は、あくまでも「新潟県貫属」という建前なので、明治五年（一八七二）八月には京都府庁に對し、一家六人（本人・妻・母・弟・娘二人）の「寄留届」を提出している。

さて、この御用留において、最後の庄巻ともいべき記述は、寺田政得本人の秩禄処分に関する記事である。先に触れたように、知行八十石を宛がわれていた政得は、版籍奉還によってそれを返上した結果、家禄十一石（明治八年九月、現米から金禄に改定）を給付されていたが、明治九年（一八七六）八月、金禄公債証書発行条例の公布によって、その廃止が確定した。

やがて、二年後の明治十一年（一八七八）十月一日、京都府公債懸りより、新潟県士族寺田政得あてに、「金禄公債証書御下渡二付、明三日午前第八時、出頭可有之事」との通知が届いた。御用留第26冊、十月三日条には次のようにある（図版参照）。



但、写本紙両通相廻置候事

なお、寺田政得の本籍は、あくまでも「新潟県貫属」という建前なので、明治五年（一八七二）八月には京都府庁に對し、一家六人（本人・妻・母・弟・娘二人）の「寄留届」を提出している。

さて、この御用留において、最後の庄巻ともいべき記述は、寺田政得本人の秩禄処分に関する記事である。先に触れたように、知行八十石を宛がわれていた政得は、版籍奉還によってそれを返上した結果、家禄十一石（明治八年九月、現米から金禄に改定）を給付されていたが、明治九年（一八七六）八月、金禄公債証書発行条例の公布によって、その廃止が確定した。

やがて、二年後の明治十一年（一八七八）十月一日、京都府公債懸りより、新潟県士族寺田政得あてに、「金禄公債証書御下渡二付、明三日午前第八時、出頭可有之事」との通知が届いた。御用留第26冊、十月三日条には次のようにある（図版参照）。

十月三日 京都府公債証書掛り罷出、名札且印鑑雛形書、差出候処、少々溜ノ間ニ而控居候様二付、控居候処、呼出、左二

- 金禄 六拾五円四拾五錢二厘
- 十二年 七百八拾五円四拾二錢四厘
- 丙号八十二 現金 四拾二錢四渡り
- 残而公債証書、左二
 - 参壹貳四番
 - 丙保号 壹五参四番 丙里号 参壹貳参番 丙丹号五八九参番
 - 五百円 壹枚 貳百円 貳枚 五拾円 壹枚

丙丹号六五八参番 丙礼号 参九九参番

貳拾五円 壹枚 拾円 壹枚

右に見るように、六十五円四十五銭二厘の金禄元高に対して、その十二年分に当たる金額、七百八十五円四十二銭四厘が、公債の形で渡された。その公債証書は、五百円券が一枚、百円券が二枚、五十円券が一枚、二十五円券が一枚、十円券が一枚、計七百八十五円であり、端数の四十二銭四厘は現金支給である。後掲する券面の記載に見えるように、それら公債の償還は、明治十五年から三十九年までの間に抽選で行われ、明治十年から起算して償還までの間は年七分の利息が、三分五厘ずつ二回に分けて支払われる（図版参照）。

政得は、その証書券面をも丁寧に筆写している。図版では、読み取りにくいのが、五百円証書の券面には、次のような記載がある（カタカナをひらがなに直し、句読点を補った）。

此公債証書は明治九年第八月第百八号の公布に拠りて今之を交付す。

此証書の利息は明治十年より始め、明治三十九年迄、年七分の割合を以て条例の如く年々両度に通貨にて払ひ渡すべし。此証書の元金は明治十五年より明治三十九年迄二十五年の間、毎年大蔵省の都合相を以て抽籤の方法を用ひ、払ひ戻すべし。此の証書は外国人を除の外、何人に論なく譲渡すること、所持人の勝手たるべし。但、譲渡時には其所持人より何某へ譲渡したると云ふことを証書の裏面へ細書し、調印の上、地方官庁へ差し出して其検印を受くべきものなり。

明治十年一月四日

大蔵卿 ④

さすがに商家の出身だけあって、政得は、このような公債の交付と、その償還の仕組みを理解することにも長けていたとみてよいであろう。筆写の仕方の丁寧さにも驚かされるほどである。ただし、政得が、この公債を償還されるまで所持し続けていたのか、それとも償還以前に一部でも売却して現金化したのか、その後の経過については現在の段階では詳らかではない。これが、寺田家御用留が実質的に重要な内容を持つ最後の記録である。

おわりに

以上の様に本稿では、寺田家とその旧蔵文書の概要を紹介するとともに、御用留を中心として、その史料群が持つ史料的な価値、いいかえれば、その史料からどのようなことが明らかになるか、といった諸問題について考察してきた。その内容を、以下では、大きく三点にまとめ、結びとしておきたい。

第一に、大名京都市留守居の具体的な活動内容を明らかにしうる点である。繰り返し触れてきたように、京都市留守居については、これまで研究らしい研究が皆無であった。しかし、近年の研究動向においては、近世の朝廷についても、改めて光が当てられるようになっていく。そのような動向を踏まえ、近世末期～近代初期において朝廷側と大名が、京都市留守居を介して、どのような関係を取り結んでいたのか、ま

た留守居同士の交流は、どのような政治的意見を形成していたのかなど、十九世紀政治史を考える上で重要な論点を深められるだろう。

第二に、寺田家の身分上昇に関わる件である。寺田家は、もともと「桔梗屋」の屋号を持つ呉服商であつたが、喜三郎政忠の代に、溝口家の用聞を継承するとともに、呉服商を廃業したとみられる。つまり、京都の町人が、完全に武士に身分上昇したのである。近世における、身分の上昇（または下降）など、身分間の異動についても、近年の研究動向で注目されつつある課題であり、寺田家は、その格好の事例を提供してくれるのである。

第三に、寺田政得の代における秩禄処分具体的な様相が明らかにうかがえる点である。政得は、公債懸りの呼び出しに応じて京都府庁に出頭し、公債証書を受け取る経過などを、実に詳細に記している。この日記だけでなく、関係史料を精査すれば、一人の士族を事例にした、金禄公債の処理の仕方や、その後の就業のあり様なども、具体的に明らかにできる可能性がある。このような、具体的、個別的な事例研究も、実はこれまで存在しないものである。

以上のように、寺田家文書は、多角的な観点から考察することにより、京都留守居にとどまらない豊富な内容の課題について、検討することができる史料群であるといえよう。

本稿は、科学研究費助成事業（基盤研究C）課題番号25370805「京都留守居を通じた公武関係史の研究」（研究代表者青山忠正）による研究成果の一部である。

〔注〕

- (1) 高橋貞一「富士谷家文書」、『佛敎大学研究紀要』五五号、一九七二。
- (2) 年代が確認できる最も古い文書は慶安五年の屋敷沽券状（「永代売渡シ申家屋敷之事」調査番号669—003）、最も新しい文書は明治三四年の歌集（「情歌集帳」調査番号593）である。
- (3) 呉服御用については、「御召御用」や「御服御用」などの表現も確認できる。
- (4) 「御納戸茶色本」調査番号221—001など。
- (5) 明治元年の御用留は、本文書群中に伝存していない。これは、明治二年に始まった太政官の修史編纂事業によって、旧大名家に関する史料が蒐集された際、溝口家の求めに応じて政得が史料を提供したためと考えられる（「国史御編纂之儀二付」調査番号244）。
- (6) 『文化増補 京羽二重大全』二上（文化八年板行）にて初見される。
- (7) 「桔梗屋喜兵衛家名相続二付」調査番号670—004。
- (8) 「預り申銀子之事」調査番号668—003。
- (9) 「一札之事」調査番号671—010など。
- (10) 「戌年夏御注文」調査番号650など。
- (11) 「桔梗屋喜八郎家名相続二付」調査番号670—002。
- (12) 「桔梗屋喜兵衛家名相続二付」調査番号670—003。本文書によると、喜八郎は「当九月中致病死候」とあり、日付は「午十一月」となっている。喜八郎への家督相続は寛政五年、京都用聞拝命の文化一〇年には既に喜兵衛が家督を継いでいる。このことから、喜八郎が死去した「午」年は、寛政一〇年か文化七年のことと判断できる。
- (13) 喜兵衛こと喜右衛門政求が京都用聞を拝命した際、寺田家が町方へ提出した「口上書」や「一札」には、つよの連署が確認できる（「諸事御用留并日並」調査番号001）。このことから、彼女が当時の寺田家を代表する人物であつたことが窺える。
- (14) 「諸事御用留并日並」調査番号001。
- (15) 「家督願書出府諸留記」調査番号167。
- (16) 虎次郎は、後に里子へ出されるが、天保五年に不通養子となつて寺田

家に出戻っている（「一札之事」調査番号655—004）。

(17) 「家督願書出府諸留記」調査番号167。

(18) 「家督願書一件控」調査番号168。政得相続の際、呉服御用に関する言及はなされてない。このことは、政忠が家督を相続した頃から「桔梗屋」の屋号を確認することができず、その一方で、溝口家の呉服御用に川口家が関与を深めていることが関係していよう。政忠は、政求死去の直前に寺田家に養子として入ったことから、商いに関して不案内であったとみられる。そのため、家業である呉服商いを継続することは難しく、呉服御用は川口家が代行する体とならざるを得なかったのだろう。政忠の代に、寺田家は呉服商を廃業したと考えられる。

(19) 「寺田喜三郎京都留守居任命二付」調査番号610—004。

(20) 「文久改正 京羽津根」一（文久三年板行）に、溝口家「家来 寺田喜三郎」の名が確認できる。

(21) 「寺田喜三郎京都留守居任命二付」調査番号610—004。

(22) 第二章で見るように維新後、政得は新潟県貴属士族に編入され、家禄を支給されている。

(23) 「覚」調査番号671—011。

(24) 「古御掛り金年賦二而相渡儀二付」調査番号672—019。

(25) 「近年大借金難儀二より御救願二付」調査番号672—009など。

(26) 「覚」調査番号670—001。

(27) 「桔梗屋喜八郎家名相続二付」調査番号670—002。

(28) 「諸事御用留并日並」調査番号001。この扶持借上は、文久三年まで継続された（「諸御用留」調査番号213）。

(29) 「御扶持方并御配当金仕談書」調査番号206など。

(30) 『天明増補 京羽二重大全』二（天明四年板行）にて初見される。

(31) 「深尾右源太方返事無之儀二付」調査番号672—012。

(32) 「深尾右源太方返事無之儀二付」調査番号672—017。

(33) 「深尾貞次郎一件帳」調査番号149。

(34) 「諸事御用留并日並」調査番号001。

(35) 「起請文前書」調査番号671—004など。

(36) 「御即位二付御使者被差登候一件留記」調査番号299など。

(37) 「真如堂宗廟記」調査番号279など。

(38) 『続徳川実紀』第四篇、吉川弘文館、一九九九年復刻、四一〇頁。

(39) 「文久改正新增細見京絵図大全」（文久二年板行）に、溝口屋敷は確認できない。

(40) 「御上洛一条御用留」調査番号710—031など。

(41) 「新発田藩史料」（一）藩主篇、新発田市史刊行事務局、一九六五年、三七三—三七四頁。

(42) 「寺田喜三郎京都留守居任命二付」調査番号610—004。

(43) 「口上覚」調査番号711—005。

(44) 「諸家様問合留」調査番号266など。

(45) 「御親征行幸中不及参賀二付」調査番号792—013など。

(46) 『太政官日誌』第一卷、東京堂出版、一九八〇年復刻、三二七頁。

(47) 「寺田喜三郎公用人助役任命二付」調査番号610—002など。

(48) 『太政官日誌』第三卷、東京堂出版、一九八〇年復刻、四五九頁。

(49) 「公用人御役名之義二付」調査番号800—013—003。

(50) 「公用人称呼大属与改称二付」調査番号800—014—002など。

(51) 「家督願書一件控」調査番号168。

(52) 「御用留」調査番号218。

(53) この「一〇万石高直り」については、『新潟県史 史料編 近世6』一一一—一一五頁を参照。

(54) 「諸藩一覽」八〇頁を参照。文部省『維新史 附録』明治書院 一九四一年、所収。

(55) 『藩制一覽』二（日本史籍協会 一九二九年初刊）東京大学出版会 一九六七年復刻、一三九—一四三頁、四五三頁、所収。

（あおやま ただまさ 歴史学科）
（あさい りょうすけ 大学院文学研究科博士後期課程）

二〇一三年十一月十五日受理

寺田家略系図

